

平成 9 年 3 月 19 日 学校教育審議会答申内容（抜粋，原文のまま）

II 幼稚園・小学校の統廃合と校园区の検討

1 統合の必要性

園児・児童数が大幅に減少して学校園の規模が著しく縮小することになった場合，一つは児童等の学習意欲の向上や社会性の育成，もう一つは学校園の適正運営の面で問題が生じてくる。

(1) 子どもたちを適正に指導・育成していく上には，学校全体に活気がみなぎっていることが強く求められる。そのためには一定規模の児童数が必要である。児童数が多いと運動会や文化祭などにおいて，自ずと活力が生まれてくる。また，学習活動においても互いに切磋琢磨し，学習意欲の向上に繋がる。さらに，多くの子どもたちが集団で生活する中で社会性が育まれ，より豊かな人間性が育つ。

したがって，子どもたちを育成していく上において適正な学校規模であることが望まれる。

(2) 学年 1 学級ということになると幼稚園から小学校卒業までクラス替がなく，一度クラスの中で子どもの位置が決まるとそれが固定化されてしまい，新しいグループの中で，新しい自分の個性を発揮する機会が失われてしまう。その結果，子ども社会の中において幼稚園から小学校卒業まで子どものランク付けが決定され，それぞれの子どもの成長過程において新しい可能性が創造されにくくなる。

(3) また，教師としては，学年という集団の子どもたちを複数の教師で教えていくのが基本であるが，1 学年 1 学級になると教師間の相談や協力をする機会がなくなり，学年運営をしていく上で，個人的な思いが最優先することになる。

したがって学年という集団の子どもを複数の教師が協力して育てていく状況ができにくくなり，学校運営で支障が生じることになる。

また，1 学年 1 学級という状況の下で，児童が先生との間で不適応を起こすなどの状態になった場合，その児童の居場所がなくなることになる。

以上のことなどから，子どもたちの社会性や，より豊かな人間性を育成していくためには，適正な規模で学校運営をしていく必要がある。